

カンボジア・ベトナムの湖沼・河川汚染状況 —視察旅行に参加して—

松田 貫之*

はじめに

2002年11月15日から19日にかけて、福岡県環境計量証明事業協会（福環協）の企画による「湖沼河川汚染状況視察旅行」に参加した。帰国後、「環境管理」編集担当より原稿依頼書を手渡されたとき、少し困惑してしまった。確かにカンボジアのトンレサップ湖やベトナムのメコン川には行ったが、専門知識のない私にはクルーズに終わってしまった感がある。今、心に残るのは、アンコール遺跡をとりまく深い森の静寂とベトナムのエネルギーあふれる喧噪の残響である。ここに旅行記を書くことで、ご容赦いただきたい。

参加者及びスケジュール

福環協は、県内の計量証明事業を営む62社の事業所が、分析精度の維持向上をはかり、地域住民の保健と環境の保全に寄与することを目的に組織されたものである。現在、当協会の矢野総務部長が会長を務めている。海外視察は、シンガポール、台湾に続き今回で3回目となり、参加者は12名であった。そのうち当協会からは矢野総務部長と松田が参加した。

15日：福岡空港8時発、台北（台湾）及びホーチミン（ベトナム）経由シエムリアップ空港（カンボジア）19時着

16日：世界遺産のアンコールワット、アンコールトム観光

17日：午前中アンコール遺跡群観光、午後からトンレサップ湖クルーズ後、空路ホーチミン空港20時着

18日：午前中ホーチミン市内観光、午後からミトーのメコン川クルーズ

19日：ホーチミン空港11時発、台北経由福岡空港20時着



インドシナ半島の国々

*（財）九州環境管理協会 総務部渉外課課長

カンボジア王国の概要

カンボジアはインドシナ半島の中央に位置し、ベトナム、ラオス、タイに隣接している。首都はプノンペンにあり、人口は1310万人(2002年現在)、面積は約18万1000平方キロで北海道の2倍強の広さである。源流をチベットに発する4350キロのアジアの大河メコン川と東南アジア最大の湖トンレサップ湖を中心とした農業国である。

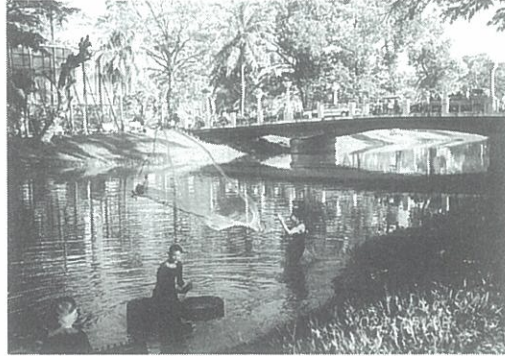
現在は東南アジアの小さな国だが、9～13世紀半ばにわたり栄えたアンコール王朝は、ラオスからマレー半島北部までインドシナ半島全域を支配下に治めた。100年に及ぶフランス統治から完全独立を果たしたのは1953年だが、その後、ベトナム戦争の影響やクーデター、さらに1975年のポル・ポト政権になると多くの人が非業の死を遂げたり、難民となって世界に散らばった。ついに紛争の解決に国連が動きUNTAC(国連カンボジア暫定統治機構)を設立し、1993年新生カンボジア王国が誕生し、再建に向かっている。

シェムリアップでの所感

【シェムリアップ川】

どんよりとした赤茶色したシェムリアップ川が町なかを南北に流れる。朝早く川沿いを散歩に出かけたが、すでに日の出とともにこの町の人々の生活は始まっていた。バイクや自動車が往来する橋のたもとで投網を打つ子供、たらいに入れたモヤシを洗う子供、その横の道ばたで洗ったばかりのモヤシを売っている母親。さらに上流に向かうと、牛は見あたらないうが新鮮な糞が落ちている。多分、町が動き出す前に川で牛を洗ったのだろう。そして、人も行水をし歯磨きをし洗濯をしている。そして自動車修理場の洗車の排水がその

まま川へ。のっけからこの町のたくましさは圧倒されたが、子供たちのさわやかな笑顔には安らぎを覚えた。



早朝のシェムリアップ川

【アンコール遺跡群】

アンコール遺跡はシェムリアップ市から北へ5～10キロほど行ったあたりを中心に広がる。約550年にわたるアンコール王朝時代、代々の王たちは神仏と一体になった自らの姿を誇示するために大寺院を建立し、農業用の灌漑用水や道路の建設にいそしんだ。そのいにしへの栄華の跡がアンコール遺跡群である。なかでも有名なのがアンコールワットとアンコールトムで、日本語が堪能な現地ガイドの青年の説明によるとアンコールは都、ワットは寺院、トムは大きいという意味とのこと。



ジャングルの中のアンコールワット遺跡

農業国カンボジアの外貨獲得の手段は観光産業であろう。ガイド青年によると世界中から60万人の観光客が訪れ、その数は毎年30%ずつ増えているそうである。外国人観光客誘致の最前線のシェムリアップは、王国をあげて観光インフラの整備に取り組んでいる。そのためホテルの建設がどんどん進み、今後どれだけの田園農地が無くなってしまおうのか、すこし気がかりである。

【トンレサップ湖】

トンレサップ湖はシェムリアップ市から南へ10キロほどの所に広がる東南アジア最大の湖である。トンレサップ川を通してメコン川につながり、ベトナム南部のデルタ地帯へ流れ込む。乾季のトンレサップ湖の面積は約3万平方キロだが、雨季（5月中旬～11月）には、メコン川の水が湖に逆流して、湖水の面積は3～4倍に広がり、水位は1～14メートルも上昇する。水は周辺の森林や田畑や沼にまで流れ込んで、農業や漁業に恩恵を与えている。



水上の教会

遊覧船で湖を周遊したが、水上の教会、水上の売店、水上の学校まである水上の漁村であった。マングローブのような木々や水草をぬって沖に出ると、見渡す限りの水平線であ

る。強い直射日光を受け湖面はキラキラと輝き、遺跡のレリーフにも描かれていたこの湖は、観光開発が進む町の喧噪をよそに何らその頃と変わっていないのかもしれない。



水上で暮らす人々

ベトナム社会主義共和国の概要

ベトナムはインドシナ半島の東側、南シナ海に沿うようにS字型に延びている。首都はハノイにあり、人口は7865万人（2002年）、面積は33万2000平方キロである。国土は北緯23度から、赤道近くの北緯8度にまで及び、ほぼ山脈と高原地帯からなる。

紀元前から10世紀に及ぶ中国支配、19世紀末のフランス支配、そして記憶に新しいベトナム戦争。ベトナム社会主義共和国の成立は1976年である。その後1978年のカンボジアへの侵攻、翌年の中越戦争による国力疲弊、経済衰退、難民流出と最貧国のひとつとなった。1986年共産党大会にて採択されたドイモイ（改革するという意）政策により市場経済の導入がなされ、1995年ASEAN（東南アジア諸国連合）に加盟した。今、ベトナムは経済だけでなく文化にも自由な気風が生まれ、あらゆる面でエネルギッシュな変革を遂げている。

ホーチミンでの所感

【ミトーのメコン川】

ミトーはホーチミン市の南西に位置し、車で片道2時間あまり、チベット、タイ、ラオス、ミャンマー、カンボジアを経てきたメコン川デルタにある町である。

ミトーからボートに乗って、果樹園の島、泰山島へ渡った。そこで3~4人乗りの小さな手漕ぎボートに乗って果樹林の中へ。ベトナム戦時中は激戦区だった樹林だそうで、今は南国のフルーツがたわわに実をつけている。この島ではココナッツキャラメルを手作業で作っており、ココナッツの殻を燃料に薄茶色のヤシの汁を何時間も煮詰め、あたり一面甘い香りに包まれていた。試食させてもらい、あまりの素朴なおいしさに感動し職場への土

産としたが、私の感動は伝わらなかったようである。

おわりに

正味3日間メコン川の下流部を旅したが、水と共存した生活を営む一端を垣間見させてもらった。洪水のたびに氾濫するこの川は暴れ狂う竜にたとえて九竜ともよばれている。しかし大河がもたらす恵みは大きく、豊かな大地からは米や野菜や果物が、豊かな川からは沢山の魚がもたらされ、はてしなく永い間人々を支えてきた。そして、今も人々は自然の営みを受け入れ生活している。それはカンボジアとベトナムの人々が持つ心の豊かさかもしれない。